

新学習指導要領における公民科と道徳教育 —指導案の工夫を中心として—

福岡県立山門高等学校主幹教諭
菊池 康博

1. はじめに

2011年の東日本大震災により、東北地方の一部では、生活が一挙に失われてしまったところもあった。そのような中であらためて家族の絆の大切さが叫ばれた。その一方で、企業の不祥事や幼児虐待などがたびたび起こり、倫理観が揺れ動いている。まさに、人間としての在り方生き方が問われていると言える。

新学習指導要領は、思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視するとともに、道徳教育や体育の充実を目指している。つまり、「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し…未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする」(第1章 総則)としている。そして、道徳教育の充実を図るために、各教科、総合的な学習の時間、特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行わなければならないとしている。

2. 公民科と道徳教育

戦前の「修身科」は、教科中の教科として、まさに教育勅語の精神を具現化するものであった。それが戦後の「社会科」に再編成され、民主主義の教育と言われた。それは、「なすことによって学ぶ」という考えのもとに、問題解決学習や社会科見学などが重視され、生活の中から生き方を学び取るものであった。徳目を上から注入する教育に代わって、体験の中から学ぶ教育が重視されたことは意味があったが、それによって、道徳性が育ったとは必ずしも言えない。これは、戦後に問題行動やいじめ、不登校が増加したことからも分かる。

新学習指導要領は、公民科の目標として、「人間としての在り方生き方」について自覚を育て、「公民としての資質」を養うことをあげている。つまり、

それは、価値観が多様化し、生き方に迷う現代社会において、自己を深く理解し、広い視野に立って、社会の一員として生きていく力を育てることである。

生徒に「どんな授業を望むか」というアンケートを取ると、「大学入試や就職試験に役立つ授業」を抑え、「生き方を考える授業」が常に一位に上がってくる。青年期という発達段階にあることも一因ではあるが、生徒たちが激動の現代社会の中で生き方に迷い悩んでいることがうかがわれる。

3. 道徳内容と教科との関連表

新学習指導要領に「全教師が協力して道徳教育を展開するため、第1款の2に示す道徳教育の目標を踏まえ、指導の方針や重点を明確にして、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について、その全体計画を作成すること」とあるように、道徳教育は、全教育活動が有機的に関連しあって進められなければならない。

そこで、道徳教育の内容を、「自分自身に関すること」、「他者とのかかわりに関すること」、「自然とのかかわりに関すること」及び「集団や社会とのかかわりに関すること」の四つに分け、各教科、総合的な学習の時間、特別活動との関連を明らかにした。そして、たとえば、「集団や社会とのかかわりに関すること」をさらに、「民主的な考え方」、「遵法精神と公德心」、「我が国の伝統と文化の尊重」、「勤労・奉仕の精神」そして「国際社会への貢献」に分類し、関連をより分かりやすくした。

これを公民科に当てはめると、他の教科とは異なって、ほとんどの指導内容が道徳の内容に当てはまる(次ページ表)。公民科の目標から考えても、道徳教育の中心となるべき教科であることがわかる。また、特別活動との関連も重要である。

4. 指導案と授業実践

右の関連表に基づいて実際に授業を行うにあたっては、関連表を指導案に落とし込み、それによって授業を展開していかなければならない。

(1) 指導案の工夫

教科における道徳の内容を指導案の中でどのように示すかであるが、単元設定の理由の中の単元・題材観において、関連表のどこに位置づけられるものかを表示する必要がある。

たとえば、「政治参加と民主政治」という単元の単元・題材観において、「本単元は、本校で作成した道徳内容と教科等の関連表の『集団や社会とのかかわりに関すること』の『他国を尊重し国際社会の平和と発展に貢献する人間を育成する』に位置づけられるものである」と明示しておく、この単元における道徳の内容の位置づけがはっきりし、後の生徒観の「政治や経済への関心が高い」や、指導観の「時事問題に関する読解力や表現力を養成し文書にまとめる」に結びつく。

また、指導案の単元の指導目標の次に「道徳的視点」という項目を設け、本単元の道徳的な内容をどのような視点から指導するかを明らかにする。そして、それが本時の目標につながるようにする。

このようにして、教科における道徳内容の位置づけと指導の関係を明確にすることが大切である。

(2) 公民科教師の役割

道徳教育は、すべての教科・領域で行うものであるが、その内容から見ても、公民科の教師が中心とならなければならない。新学習指導要領解説の総則編も、「公民科やホームルーム活動を中心に各教科・科目等の特質に応じ学校の教育活動全体を通じて、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に探求し…」としている。

そこで、公民科の教師としては、道徳教育推進委員会などで全体計画の作成に携わるとともに、教科を超えた広い視野から全体を見渡し、各教科や特別活動にも助言していかなければならないし、これから道徳教育の中心的な役割を果たしていかなければならない。

教科等	国語	地理歴史	公民
道徳内容			
民主的な考え方を身につけるとともに集団の中での役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。	「国語総合」「現代文」 ディベートやプレゼンテーション、班別活動などの学習をとおして、民主的な考え方や集団の中での役割について学ばせる。		「現代社会」 民主主義国家における市民としての責任と義務、社会の形成者としての自らの役割について考えさせる。
道徳精神・公徳心を身につけるとともに公共の精神を尊ぶ人間を育成する。	「国語総合」「現代文」「古典」 儒家の思想や小説中の人物の生き方から、自己の生き方や人としての在り方について考えさせる。		「現代社会」「政治・経済」 近代国家の柱である法治主義の意味を理解させるとともに、法以外の道徳・倫理についても考察させる。
我が国や地域の伝統と文化を尊重し郷土を愛する人間を育成する。	「古典」 古典をとおして、昔から今につながる伝統や文化について学ばせ、自国に誇りを持つとともに郷土愛を育む。	「世界史」「日本史」「地理」 我が国や世界の諸地域の文化・宗教等についての理解を深めさせ、それぞれの文化を尊重する態度を養う。	「現代社会」 我が国の年中行事や通過儀礼等について、その起源や意味等についての理解を深めさせる。
社会生活を行う上で必要な勤労・奉仕の精神を培う。	「国語総合」「現代文」 社会や人間をテーマとした文章を学習することをとおして、社会で必要とされる「勤労」や「奉仕」について考えさせる。		「現代社会」「倫理」「政治・経済」 政治、法律、経済等の様々な制度や文化について理解させ、社会における役割と責任について理解させる。
他国を尊重し国際社会の平和と発展に貢献する人間を育成する。	「国語総合」「現代文」 戦争と平和、国際社会に関する文章の学習をとおして、他国・他民族との違いを踏まえて付き合うということ学ばせる。	「世界史」「地理」 世界の諸地域、国々の歴史・文化・宗教等について理解を深めさせる。	「現代社会」「政治・経済」 国際社会に存在する諸問題を理解させ、日本の果たすべき役割と日本人の生き方について考えさせる。

5. むすびにかえて

東日本大震災の後、家族や社会のあり方が問い直され、絆や連帯といった共同体を重視する方向へ価値観が移ってきている。人は一人では生きられないものであり、人と人との関係が何よりも大切である。道徳とは、人と人との関係の中で、いかにして、人間を尊重し、生命への畏敬の念を持つかということである。そうすると、道徳教育は今後、もっとも大切な教育の一つであると言える。価値観が多様化し、生き方に迷う中で、生徒は生き方の指針を求めている。ハーバード大学のサンデル教授の正義の授業が絶大な人気を得ているのも頷ける。かつてのように、勉強して有名大学に合格すれば幸せが待っているわけでもないのである。

社会科から公民科が分離して10年以上過ぎた。公民科は、大学入試の主要教科から離れたが、いま、新たに道徳教育の主要教科として、存在意義を問われている。